

第 2 回 新潟市芸術創造村・国際青少年センター指定管理者申請者評価会議 議事録

会議名：新潟市芸術創造村・国際青少年センター指定管理者申請者評価会議

日時：平成 29 年 10 月 30 日（月） 午後 1 時から午後 5 時 15 分まで

会場：市役所本館 6 階 第 2 委員会室

委員：梅津委員、木伏委員、小山委員、杉浦委員、丹治委員、中村委員 計 6 名

傍聴者：7 名

事務局：文化スポーツ部文化政策課、教育委員会地域教育推進課（代表）

発言者	発言内容
中村会長	<p>それでは時間になりましたので、プレゼンテーション及びヒアリングの開始となります。</p> <p>事務局は傍聴者と申請者を入室させてください。</p>
中村会長	<p>申請者からプレゼンテーションを行っていただきます。時間は 60 分以内です。55 分経過時と 60 分経過時にベルを鳴らしてお知らせしますので、時間厳守でお願いいたします。準備ができましたら始めてください。</p>
申請者	<p>環境をサポートする株式会社きらめきです。</p> <p>本日は貴重なお時間をいただき誠にありがとうございます。これより、事業計画書につきましてご説明させていただきます。</p> <p>当社は同施設事業における経営理念として、「自然・創造・共生によるまちづくり」、「市民が活発にふれあう地域世代間交流拠点を目指します」を掲げました。同施設の周囲には動植物が豊富な松林があり、目の前には夕日と砂浜が美しい日本海が広がっております。来場することにより四季の移ろい、自然の優しさ、厳しさを感じることができる絶好のロケーションです。その自然環境の中で子どもたちが普段ふれあう機会が少ない芸術家や創作作品に触れる、市民の方々が創作活動にいそしむ、そして、そこに交流や支援の輪が生まれる。私たちは、さまざまな体験を通して子どもたちが自然、地域、外国の方々などと積極的にふれあうことで、共生力を身につけた心豊かな子どもに育ててほしい。また、一部の愛好家や教育関係者だけでなく、同施設を地域の方々が気軽に立ち寄れる憩いの場、地域コミュニティ活動の拠点にしたいとの思いから、今回、公募に参加させていただきました。</p> <p>経営理念を具現化するための経営方針として、以下の 3 項目を掲げました。経営方針 1 「水と土の芸術祭の理念を継承した文化芸術活動支援事業展開」経営方針 2 「プロジェクトアドベンチャーと同種体験活動プログラム、ふたばアドベンチャーの設置」経営方針 3 「地域の方々が 3 世代一緒に利用できる施設」。これらの方針に従い、事業運営を行ってまいります。</p> <p>具体的目標設定についてですが、新潟市の公の施設管理型評価書では、平成 30 年度の利用人数目標は年間 58,000 人以上となっております。ですが、当社は利用人数目標を 64,530 人としました。その根拠ですが、新潟市の 58,000 人という目標が平成 26 年度の西大畑少年センターでの実績約 52,000 人と、旧二葉中学での水と土の芸術祭 2015 サテライト会場実績の約 5,800 人が基になっていると</p>

推測し、芸術系事業ではもっと利用人数を増やすことができると考えたからです。

目標設定でも分かるように、当社は体験系事業を基本事業と位置づけております。西大畑少年センターの事業にさらなる付加価値を創造し、そのうえで統括ディレクターを中心に水と土の芸術祭から派生した芸術系事業を市民と協働で体験活動との融合に挑戦いたします。

次に、そのための職員配置の特色についてです。館長には教員資格を有した英語能力のある人材を配置します。そして事務の効率化、所管課対応として指定管理者業務に精通した事務局長を配置します。施設維持管理の責任者として施設管理長を配置し、非常勤のプロパティーマネージャーとともにエネルギー削減計画にも取り組みます。運営スタッフについては、西大畑少年センターのスタッフを原則継続雇用いたします。さらに、国際交流として外国人を1名雇用し、週2日程度勤務していただきます。なお、外国人スタッフには自主事業として、「初めての英会話教室」の講師も担当していただきます。そのうえで、事業運営については経験豊富なディレクター陣を責任者として配置します。小川弘幸氏が統括兼芸術系ディレクターとして常駐、鳥羽和明氏が体験系ディレクターとして非常勤にて指導を行い、加えて、業務経験のあるアシスタントディレクターが常駐します。

これより、両ディレクターより各事業の説明をさせていただきます。

私から文化芸術活動支援事業への取り組みについてご説明させていただきます。

私は今から30年前の1987年に民間の創庫美術館での運営スタッフを立ち上げに、アートをはじめとする新潟における文化活動の制作に携わるようになります。そして1992年、今年で25年を迎えましたが、NPO団体文化現場として独立し、新潟の独自性を生かしたさまざまな分野の芸術活動の企画制作を行ってまいりました。そして、新潟の文化活動をより豊かにしていくためには、まず環境整備が必要だという考え方のもとにプロデューサー等の人材育成にも取り組んでまいりました。

具体的には、新潟市芸術文化振興財団が実施していたアートプロデュース講座、そして新潟デザイン専門学校等でのイベント論やアートプロデュースについての講義を持っておりました。ほかに、2007年に新潟市が政令指定都市になった際に、新潟政令市誕生記念「春、祝祭」という新潟市民の文化力が結集した2日間にわたるシティプロモーションのイベントの実行委員長を務めました。ほかにNPO法人新潟絵屋、そして大地の芸術祭の企画運営をしておりますNPO法人越後妻有里山協働機構等の立ち上がりスタッフとして理事を務めてまいりました。ほかに、新潟県の事業になりますが、阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業のプロデューサーも務めておりました。

2009年からは、新潟市で開催しております水と土の芸術祭とのかかわりを持つようになります。準備から含めると、およそ10年近くこの芸術祭事業に携わってまいりました。市民サポーターズ会議の代表に始まり、2012年にはプロデューサー、2015年には総合ディレクター、そして来年度開催する2018年にはアドバイザーということで携わっております。そして文化現場時代には、さまざまな海外アーティストを招いた国際文化交流事業も実施してまいりました。記載のとおり

です。最近では、台湾との文化交流を盛んに行っておりまして、台湾でも非常にアートプロジェクトが盛んです。そして新潟をはじめとする日本のアーティストを紹介したり、台湾で水と土の芸術祭の事例をはじめとし、シンポジウムのパネリスト及び講師等で行き来を重ねております。

経営方針についてご説明させていただきます。文化芸術活動支援事業の経営方針として、第1に、水と土の芸術祭の理念を継承した事業展開を行うことを第1の考え方としております。と申しますのも、本市は水と土の文化創造都市としてそれを推進するというので、これまでさまざまな文化活動を実施してまいりましたが、まさに新潟市のアイデンティティを象徴する総合的な文化イベントとして水と土の芸術祭は位置づけられるものと考えからです。水と土の芸術祭の理念は、私たちはどこから来て、どこへ行くのか。新潟の水と土から過去と現在（いま）を見つめ、未来を考える、というものです。これはひとえに新潟の地形的、地理的、歴史的成り立ちと、そこで培われてきたさまざまな暮らしや文化、まさに新潟のアイデンティティを探るという行為であると同時に、自分たちの立脚点、そして持続可能な豊かな暮らし、豊かな文化とはどこにあるのか、未来を描くためにその価値観を探っていくとする取組みです。この理念を継承した形で、本施設での文化活動支援事業も展開していきたいと考えております。

次に、アーティスト・イン・レジデンスの事業ですが、これについても水と土の芸術祭との連携を図ることで新潟市ならではのレジデンスにしていきたいと考えております。もう一つ、来年の芸術祭に関して、今まではアーティストの招へいと公募作家の2枠があったのですが、公募枠がなくなりました。水と土の芸術祭に参加することを目的に頑張ってきたたくさんのアーティストが本施設のアーティスト・イン・レジデンスに応募することによって、水と土の芸術祭に繋がる登竜門としての位置づけも図っていきたく思います。このことはアートプロジェクトに限ったことではなく、このレジデンスで新潟に滞在することによって、地域の人たち、新潟市民の人たちと関係を育んでいく中で、後ほど述べますが、市民プロジェクト等で、新潟で創作し、発表の場を今後持っていく、といった繋がりを持てるレジデンスにしていけるのではないかと考えております。

募集についてですが、レジデンスについて、広く内外に発信をして多様な芸術家等の皆さんから参加を申し込んでいただきたいと思います。そのための発信力として、2か国語以上のホームページおよびSNSを中心とした展開。そして、これはもっともなことですが、技術専門誌等の効果的な広報媒体への発信。これは単に広告を出すだけではなく、パブリシティとして取り上げてもらいます。パブリシティとして取り上げてもらうためにも、水と土の芸術祭を開催している新潟市が作った新潟市芸術創造村で行うアーティスト・イン・レジデンスという連動した繋がり性のある発信をすることによって、よりパブリシティーも取り上げる確率が高くなると考えております。そうすると、国内外のアーティスト・イン・レジデンス施設との連携ということで、例えば、3331 Arts Chiyodaですとか、Bank ART 1929ですとか、ニューヨークのMoMAPS1とか、こういった施設は国内外にたくさんありますので、可能な限り連携を図りつつ募集の発信に

つなげていきます。

そして、アートプロジェクトとの連携ということで、新潟市内には今現在もたくさんのおアートプロジェクトが実施されております。ついこのあいだまでN I I G A T A オフィス・アート・ストリートが行われていましたし、小須戸ARTプロジェクトは、今現在、開催中です。西区アートキャラバン、浜メグリ、弥彦アートプロジェクトなど、新潟はアートプロジェクトが盛んな地域になってきました。これらを主催する人と参加する作家との連携も図っていきたいと思います。これは必ずしもレジデンスだけのことではなくて、市民交流事業等にも繋げていくという意味でも、各地のプロジェクトとの連携を積極的に図っていきたいと思っております。

特色の一つとして、東アジア諸国および姉妹友好都市との連携も、新潟らしさということで、力を入れていきたいと思っております。東アジア諸国につきましては、新潟は 2015 年東アジア文化都市の横浜に次いで 2 番目の国内開催都市に選ばれております。その際に、水と土の芸術祭をやっていることが大きく影響していたとも言われております。その際、中国の青島、韓国のチョンジュとも新潟市との連携が 2015 年に行われましたが、これらの交流を今後も続けていき、今後とも東アジア諸国との連携を積極的にやっていきたいと思います。さらに、姉妹友好都市、国際交流協定都市との連携も図っていきたいと思います。姉妹友好都市については 6 都市、交流協定都市については 2 都市あるわけですから、これも新潟の独自性に繋がることだと思います。そして、本施設が砂丘列の上に立つ、そして日本海を臨む立地からも、対岸諸国に思いをはせる、対岸諸国との交流もこの施設ならではの独自色を発揮できることになるのではないかと考えています。

続いて、招へいプログラム等の選定委員会の設置運営についてです。私どもに加えて選考委員のメンバーについても提案させていただきます。まず、アーツカウンシル新潟プログラム・ディレクターの杉浦さん。そして、そこから先は水と土の芸術祭との関係をより対外的に説得力を持たせるためにも、今現在、水と土の芸術祭にディレクターとして関わっている人たちをメンバーに加えるべきではないかということでの提案になります。新潟市美術館館長で 2018 水と土の芸術祭のアートディレクターである塩田さん、現代美術家であり市民プロジェクトの 2018 ディレクターをなされた藤さん、そして水と土の芸術祭のアートディレクターをされてこられた新潟大学の丹治さんといった方々を、ぜひ、選定委員会のメンバーに入っていただくことを提案させていただきたいと思っております。

続きまして、アーティスト・イン・レジデンスに繋がるその他の事柄ですが、初めて行うレジデンスの公募については、応募が振るわなかったり、あるいはレベルがさまざまだったり偏りがあったりと、いろいろなケースが想定されます。そうした時にも対応できるように、これまで培ってきた幅広いアーティストのネットワークを活用していきたいと考えております。実際に、レジデンスに入った際に、滞在しながら制作するのはいろいろな意味で厳しい状況が予想されます。そこで、芸術家が少しでも創作活動に快適に専念できるために、経済的支援あるいは物品的支援あるいはその他の支援を図るべく、企業メセナ協議会の協賛等のメセナ活動、そしてクラウドファンディング等を用いた展開も、作家、作品によっては図っていく

ことも検討したいと思っております。

続いて、市民との協働、市民交流活動についてですが、ここでの大きな特色は、水と土の芸術祭を支え盛り立ててきて下さっているみずつち市民サポーターズの皆さんがアーティスト・イン・レジデンスの芸術家支援等のボランティアにも積極的に入ってもらったり、市内には大学、専門学校もたくさんありますが、学生有志の皆さんからも積極的に加わってもらうということ。そして、何にも増して水と土の芸術祭の連動といった時に、まず、水と土の芸術祭が国内各地の国際芸術祭の中でも特色として注目されているのが、市民プロジェクトの躍進です。市民プロジェクトに関わる人たちが本施設を交流拠点として、あるいは、そこで発表する場として、拠点として大いに使ってもらいたい。そして中心的に、新しい創造に繋げてもらいたいということで、市民協働の象徴として市民プロジェクトの参画を促していきたいと思っております。

続いて、交流事業のレジデンスで入ってきたアーティストと市民の皆さんとによる交流事業についてもいくつか展開していきたいと思っております。具体的な内容につきましては、アーティストの個性、特性が最大限発揮できる企画を立てるということで、アーティストと協議のうえ決めるべきだと思っておりますが、アーティストトークをはじめワークショップなど、さまざまな事柄を展開していきたいと思っております。

続いて、地域、文化、芸術各団体による市民交流事業ということで、市民プロジェクト各団体との交流はもちろんのことですが、西大畑・旭町文化施設協議会異人池の会が、現在、活動しております。本施設もこの地域に属することから、これらの協議会に入りつつ、地域全体が盛り上がるような展開を図っていききたいと思っております。これらの活動がひいては市民文化の成熟、地域の賑わい空間の創造、そしてボランティアの運営能力のスキルアップ、地域リーダーの人材育成等にもつなげていきたいと思っております。

続いて、地域、文化、芸術各団体による主な市民交流活動の例として、2015年の水と土の芸術祭のベースキャンプとしての拠点会場でありましたから、旧二葉中学校、つまり本施設を用いたものをいくつかピックアップさせていただきました。まず、左手の写真ですが、これは二葉中学校の体育館の中二階のスペースで実施した市民プロジェクトですが、ここには二つの市民プロジェクトがコラボレーションしております。一つは鯛車、そして一つは鳥凧です。鯛車は、実を申しますと新潟市内各地域にあります、今、とても注目を集めているのが、やはり巻の鯛車なのです。これは新潟市の鯛車なのですが、巻の鯛車はお盆の季節に子どもたちがこの鯛車に灯りをともしてお墓参りに行ったという、江戸の終わりから昭和30年ころまで盛んに行われていた夏の風物詩だったのですが、それが時代とともに廃れて継承する人もいなくなりました。そして、鯛車復活プロジェクトという市民の有志の皆さんが巻で活動を始めたのです。そして、2009年の水と土の芸術祭第1回目のときに、鯛車が作品というかプロジェクトとして非常に注目を集めました。以降、鯛車イコール巻商店街の復活振興というようなドラマがどんどん展開していきまして、2011年にはティファニー財団が伝統文化振興賞を巻の体車復活プロジェ

クトに授与されました。本当にこの芸術祭の市民プロジェクトが新しい文化再発見の地域創造につながっているという典型的な例の一つです。

もう一つの鳥凧なのですけれども、写真がよく見えないのですけれども白鳥なのです。もちろん鳥凧はいろいろな鳥ができるのですが、この年は白鳥だけを展示しました。なぜかという、この年に新潟市の鳥として白鳥が制定されたのです。そして、日本で一番の白鳥の飛来地が新潟市です。水と土の芸術祭では潟をフィールドとして展開しましたが、本当に渡り鳥としての白鳥が来るわけです。鳥凧は柳の木を骨組みに和紙で作るのですけれども、この柳の木が新潟市の木なのです。新潟市の木で新潟市の鳥を作った象徴的な鳥凧です。ただ、このクラフトは新潟市のオリジナルといえますか、今から 40 年ほど前の 1977 年に後藤脩平さんが新潟市の公民館活動で鳥凧作りを始めたのです。そのときの受講生は 20 人不足だったので、かもめを作って日和海岸で揚げました。本当に揚げられる凧で、本物のかもめが寄ってきたというくらいリアルなものなのです。それ以降、鳥凧研究会が発足し、後藤脩平さんは亡くなりましたが、今は新潟鳥凧の会ということで、この鳥凧の技術を続けております。世界の凧フェスでは新潟の鳥凧はとても有名なのですけれども、今、新潟で鳥凧を知っている人はどれだけいるかといったら、もしかしたらあまり知られていないかもしれません。これも水と土の芸術祭の市民プロジェクトでかなり多くの人たちに新潟の鳥凧の魅力が発信された例です。本施設でも、いろいろな市民交流活動として、こういった鳥凧や鯛車の制作などもやっていきたいという思いから、紹介させていただきました。

右手は本施設ですけれども、2015 年時の芸術祭の時のアートプロジェクトが二つ写っているものですが、左手側は少し分かりづらいですけれども、朝顔がつたわっています。これは、日比野克彦さんの 2009 年から毎年継続している「明後日朝顔プロジェクト」です。右手の奥は「アプローチ。」という作品で、新潟の建築家、徳本賢洛さんと瀬戸内の建築家、岡昇平さんの二人のユニットによる作品で、木柱に植物が繁茂していて、グリーンカーテンのアプローチ版で、夏の暑い盛りにここを訪れた人たちが緑の回路を通して涼を感じながら芸術祭のベースキャンプに入るもので、日々育てることによって緑が繁茂していくわけです。ゴーヤやへちまやひょうたんとか、いろいろ作物がなる植物を育てましたので、ゴーヤが取れば料理のワークショップをやり、へちまやひょうたんが取ればそれで作品制作をやり、地域の人たちが関わりながら楽しめるプロジェクトでした。明後日朝顔やこういった植物を植えるプロジェクトなどは、今後も本施設での活用ができるのではないかと考えております。

左手は、新潟は高校のダンス部の活動が非常に盛んですが、青陵、清心、明訓の高校生のダンス部が 50 人くらいユニットを組んでやったものです。本来は、上堰潟で手作りキャンドルと一緒にやる予定でしたが、天気が悪くてできなかったので、リベンジ公演として 12 月に清心女子高校の体育館でやったものです。この手作りのキャンドルの売り上げ等で東日本大震災の被災者支援などをやりました。

右手のプロジェクトは、南区臼井のアートプロジェクトで、これは築 100 年、もう閉店していた酒屋を舞台に、実はこれもアーティスト・イン・レジデンスの市

民プロジェクトだったのです。林僚児さんというアーティストがここに寝泊まりしながら、地域の人たちと地域資源を活用しながら展開していきました。南区ですから白根の大風合戦がありますが、その大風と、臼井の行事として定着しつつある狸の婿入り行列というものがあるのですが、それらをコラボレーションしながらやりました。これは芸術祭が終わったあとも、たぬきの茶の間というコミュニティスペースとして今も活用されています。

続いて、左手は芸術祭の大きな活動プロジェクトの一つの柱である子どもプロジェクトです。これは 2012 年に旧水揚場でやった時の模様です。右手は二葉中学校で 2015 年にやった一箱古本市の模様です。こういった賑わいプロジェクトも、子どもプロジェクトおよび一箱古本市のようなものも、今後も継続してやっていきたいと思っております。

水と土の文化ギャラリーの企画展示運営ということで、この芸術祭に関連した企画展示、そしてアーカイブ的な機能を盛り込んでいきます。そして、ここで大事なのが、アーツカウンシル新潟との連携に力を入れていきたいということです。アーツカウンシル新潟も文化情報スペースを持っていて、関係書籍や、今は新潟の文化活動をやる人たちの相談に乗っています。そこと連携することによって、新潟の文化状況をリアルに生きた情報が受発信できる空間にしていきたいと思っております。ここには知識、経験、感性によってリアルな対話ができるようなスタッフが入るといった形にしていきたいと思っております。

施設の愛称、ロゴマークの公募ということで、この施設は、新潟市芸術創造村・国際青少年センターという二つの性格の機能の名称がなっております。これらが複合施設となっているわけですから、もっとこれらが一体とした呼びやすい愛称やロゴマークを設定したほうがいいのではないかと思います。

そして、全国芸術祭サポーターズミーティングというものがあります。各地でやっている芸術祭のサポーターが集まって情報交換をして芸術祭を盛り上げていこうという動きですが、2015 年、新潟に始まり、翌年名古屋、そして今年は横浜だったのですが、来年はまた新潟でやることが決まりました。ぜひ、本施設での開催をと思っております。そして、二葉アーツスクールの開講。学び舎として、いわゆる夜学みたいな形で新潟の文化制作に携わる市民の人材育成につなげていきたいと思っております。

最後に、これは私の考えですけれども、この施設はゼロからのスタートではなく、水と土の芸術祭を過去 3 回やってきて、次回、4 回目をやるわけですけれども、成果と財産のうえに成り立つものと考えております。そして、青少年活動につきましては、西大畑少年センターの活動を引き継ぎ、それを発展させるものです。ですから、この施設はそれらが複合的な施設となることによって、まさに新潟市ならではのオリジナリティあふれるもの、新潟の自然、風土を生かしたものにしていきたいと思っておりますし、最大の強みというか力を入れるべきは、そこに地域や市民が積極的に関わることだと思っております。

水と土の芸術祭は、いつかその役割を終える日がくるかもしれませんが、その時に、この施設があることで、それらの成果とノウハウが引き継がれていくものになるこ

とがあるべき姿ではないかと思って、芸術祭を連動させるという経営方針を立てた次第です。

青少年体験活動推進事業への取組みを説明させていただきたいと思います。

はじめに、簡単に自己紹介をさせていただきます。現在は、三条市グリーンスポーツセンターという施設のセンター長を務めています。こちらの施設は平成 23 年 4 月から指定管理者として管理に入らせていただいております、今年度は 7 年目になります。この 7 年間、三条市グリーンスポーツセンター主催の実施事業として、三条自然学校という冠をつけた事業を多数開催してきました。年間に 50 回から 80 回のイベントを開催してきています。中にも書かせていただきましたが、平成 26 年に国立妙高青少年自然の家で開催された妙高アドベンチャーの指導者養成講座に参加して、このあと説明させていただく人間関係づくりプログラムの指導者として、その後、各場面で活動しているところです。

平成 28 年度に三条自然学校で実施したイベントの実績を一部抜粋したものなのですが、上げさせていただきました。細かい字で恐縮ですが、多数、野外での活動を中心にイベントを実施しております。この中では、私が企画し運営しているものもたくさんあるのですが、新潟県内の他の団体と連携協働して進めた事業もあります。

平成 28 年度は、合計の授業数が 80 回、参加人数が 1,000 人を超えております。特筆すべきは右側に書いてある指導者、ボランティアの延べ人数なのですが、229 人ということで、非常に多くの方にかかわっていただいてイベントを実施しております。

ここから先は、経営方針として、青少年体験活動推進事業の具体的な取組みについてお話をさせていただきます。まず、同施設の体験系事業の中で重点的に実施する人間関係づくりプログラムについての説明です。プロジェクトアドベンチャー・ジャパンという組織が日本国内で展開しているプロジェクトアドベンチャーというアドベンチャープログラムがあります。そちらの手法と理念を取り入れた「ふたばアドベンチャー」という活動を作って立ち上げて実施していきたいと考えています。先ほども少し紹介しましたが、同じ手法を使って国立妙高青少年自然の家では「妙高アドベンチャー」という事業を提供しているのですが、そちらに確認したところ、あそこも年間たくさんの学校なりの団体の利用があるのですが、「妙高アドベンチャー」というプログラムはとても好評で、多くの団体が利用されているということでした。これまでは、新潟県内でいうと、妙高まで行かないと人間関係づくりプログラムを体験できなかったのですが、それが今度は新潟市内で体験ができるようになるというのは、各学校や団体からみてもとても大きなメリットではないかと考えています。

ふたばアドベンチャー事業の中身なのですが、プロジェクトアドベンチャーという活動にも本当に多数の活動、アクティビティがあるのですが、同施設では、最低でも 10 以上の活動が選択できるような形で整備していきたいと思っています。私の中でもいくつかプログラムを整えたいという希望はあるのですが、その点につきましては、管理が決定したあとに市と協議をさせていただいて、実際に設置する工

レメントについて決定していきたいと考えています。雨の場合でも室内でプログラムが実施できるように、体育館の中にも室内用のエレメントの設置をしていただきたいと思います。

ふたばアドベンチャーの指導者についてです。事前に研修を受けた施設職員を中心に指導経験者なり経験のある人から指導に入ってもらって、プログラムを提供していきたいと考えています。後ほど、私たちの実施事業として開催する養成講座についてご説明させていただきますが、まず、指定管理に入ることが決定したあかつきには、職員予定者を含め、県外で実施されているプロジェクトアドベンチャーの主催の指導者養成講座にも参加していきたいと思っています。今、把握しているところというと、平成30年3月には兵庫県で、同じく5月には山梨県で、4泊5日という長い時間が必要なのですけれども、プロジェクトアドベンチャーの指導者養成講座が開催されることがアナウンスされていますので、そちらにも職員予定者を中心に、私を含め参加して準備を整えていきたいと考えています。

利用団体の人数が多い場合に、それら指導者が足りない場合もあると思います。そういった場合も指導経験者、指導経験があることを条件に外部スタッフを手配させていただいて、プログラムの提供に入る予定なのですが、いざそうなってからスタッフを手配しようと思うと大変なので、今年度の内から準備を整えていきたいと考えています。

今、養成講習会に参加すると言ったのは二葉アドベンチャーのプログラム指導方法を学ぶ養成講座なのですが、なかなか指導の手順を学んだだけでは最大限の成果を引き出すには足りない部分があります。そういった面を補うために、ファシリテーション講座も実施していきたいと考えています。これは、指導手順うんぬんではなくて、限られた時間の中で、参加者にとって最大限の効果をどうしたら引き出せるかということ強く学んで身につけていただくための講座として、ファシリテーション力を身につけてもらうための講座として考えています。

ふたばアドベンチャーの最後になります。県内では、妙高で「妙高アドベンチャー」をやっています。秋葉のほうで、そんなに大きな規模ではないのですが、NPO法人アキハロハスで秋葉アドベンチャーという名称で、Akiba森のしょうがっこうとして事業展開されているのですが、私はそのの原理事長と古くからの付き合いがあるのですが、そういったところとも定期的な情報交換をしていながら、プログラムの整備、提供していきたいと考えています。

今お話ししたふたばアドベンチャーは、施設の利用団体および青少年個人を対象として参加者を募集して実施する事業の説明だったのですが、次の青少年健全育成事業については青少年個人を対象として実施する事業です。宿泊事業として年に4回、平成30年の3回と考えていますが、記載のとおりアドベンチャーキャンプ、そしてわくわく体験キャンプという二つのキャンプイベントを計4回実施していく予定です。キャンプといっても、館内の研修室に宿泊するタイプの宿泊イベントです。アドベンチャーキャンプについては、同施設の周辺環境と施設自体をフルに活用して実施できるプログラムで、参加者にそれを体験していただくというイメージです。下のわくわく体験キャンプについては、複合施設ならではのメリット

なのですが、体験系と芸術系両面のプログラムを同時に二日間で体験できるというコラボレーションイベントということで設定して考えています。よくある話なのですが、いろいろな要素のプログラムを織り交ぜてやると、例えば、野外炊事をやりたくて参加した子どもが、一緒に行われた絵を描くとか物を作るところに実際に参加してみて、芸術系のほうにもその後興味を持つようになったということもよくあると思いますので、そういう相乗効果も期待しながら実施させていただきます。

日帰り授業として、年に18回開催させていただきます。これは、一泊二日で行うものを単独で日帰りの中で開催させていただくのですが、前半にあるプログラムについてはこのあと説明させていただきますが、後半にあるたき火とかナイトウォーク、天体観測、星空観察といったイベントについては、実は、三条自然学校では平日の夜の時間を使って開催しているものが多数あります。土日にいろいろな事業をたくさん詰め込んでしまうと大変になったりするので、平日の施設利用者を増やすためにも、平日の夜の時間も使いながら、夜のアクティビティも展開していけたらと思っています。

続いて、松林や砂浜を利用した自然体験活動ということで、こちらは青少年の個人向け事業としてではなく、施設の利用団体にも二葉アドベンチャー同様に提供していく予定のプログラムです。これまで三条自然学校で行ってきたさまざまな体験活動プログラムを同施設に合わせたかたちでアレンジをして展開していく予定です。よく聞く名称だと思うのですが、ネイチャーゲームです。私も古くから指導員をやっているのですが、たまたま今、新潟県シェアリングネイチャー協会という新潟県内のネイチャーゲーム指導員の集まりの協会があって、その協会の事務局長をしています。そういったこともあって、指導員がたくさん必要だということであれば、シェアリングネイチャー協会から派遣もできますし、ネイチャーゲーム指導者の養成講座の開催も同施設で実施していくことも可能だと思っています。

海が非常に近い周辺環境ということもあって、プロジェクトウエットという名称は水をテーマにしたプログラムなのですが、地球上にある本当にたくさんの水のうち、例えば、何パーセントが私たち口にできるくらいきれいな水なのかみたいなことを、プログラムを通して子どもたちに学んでいただけるようなアクティビティです。

アウトドアチャレンジ野外力検定、あまり聞き慣れないかもしれませんが、検定会を主催して検定できるという資格を私がすでに持っているので、すぐにでも実施が可能です。全国共通のプログラムがあって、野外で火起こしをやったり、ロープワークをやったり、のこぎりで丸太切りにチャレンジするような種目があるのですが、できたら修了証を渡してというように、楽しみながら野外技術を習得していただけるような検定会です。

さまざまなプログラムの整備、提供、これまで説明してきたのですけれども、指導者が非常に重要だと考えています。まずは、二葉アドベンチャー以外の指導者の養成ということで、A業務として書かせていただいています。職員もちろん受講します。それ意外に一般の成人の方も募集して、二葉体験活動指導者養成講座を新規指導者向けと継続指導者向けにそれぞれ開催させていただきます。日帰りの開催

です。ある程度のコンテンツについては私が講師としてもやれると思っていますし、西大畑少年センターですでに実施していたプログラムを、例えば、新しくスタッフの方に覚えてもらうといったかたちになるようであれば、既存の西大畑少年センター職員の方に講師をお願いすることも可能ではないかと考えています。

肝の部分のB業務、二葉アドベンチャーの指導者の養成については、同じく施設職員も受講しスキルアップするのですが、これも一般成人の方を募集して併せてやっていきたいと思っています。これは毎年必ず年に2回、株式会社プロジェクトアドベンチャージャパンから講師を招へいして、新規の方には二泊三日の養成講座、継続の方には日帰りの養成講座というように、年に2回開催していく予定でいます。A業務もB業務も、一般の方で養成講座を受講されたあとには指導者会のようなグループに入っていて、実際に同施設での指導の現場に指導者もしくはサブスタッフとして入っていただけるように呼びかけ、働きかけをして、指導者、ボランティアスタッフの増員を図っていきたいと考えています。

これまでいくつかお話ししてきたプログラムのイメージ写真を少しだけ紹介させていただきます。一つ目、ふたばアドベンチャーとはこういう形のものになりますという紹介です。ご存じの写真だとは思いますが、左の写真はプロジェクトアドベンチャーの名称でいうTPシャッフルです。電柱のような丸太の上に立って活動するのですが、みんなで立って止まっているだけでも年齢層によっては大変なのですが、写真でいうと左にいる指導者の指示のもと、下に落ちることなく人の順番を並べ替える、ほかの人との協力が不可欠な活動です。右の方は、ウォール、壁というそのままの名称のものなのですが、身長2倍、3倍ある壁を自分たちの体だけを使って一人ずつ順番に乗り越えて、最後は全員が壁の向こう側に行くという活動の写真です。最後の一人はどうすれば乗り越えられるのかということを考えながらやるのが、すごいところかと思えます。

こちらの2枚の写真はネイチャーゲームの一場面を写したものです。左は落ち葉です。今はまさにそのシーズンなのですが、落ち葉一つとってもさまざまな活動が可能だと思います。大きさが違ったり色が違ったり形が違ったり、当然、樹種が違う落ち葉です。ものによっては臭いも違います。そういったものをさまざまな感覚を使って味わっていただくことが可能だと思います。右の写真もネイチャーゲームのアクティビティの写真なのですが、近隣に砂浜もありますので、砂浜に落ちている漂流物を使ってアートを作るという活動がネイチャーゲームにございまして、そのときの写真です。下の方は蟹でしょうか。上は逆さまを向いていますけれども、かめをあしらった作品かと思えます。

集団炊事体験活動です。簡単にいうと野外炊事ということですが、野外炊事の定番のカレーライス作りなども施設利用団体向けに、場合によっては指導したり、先ほど紹介したキャンピングイベントの中でも含んでいく事業かと思えます。カレーライス作りというと簡単に聞こえるのですが、その中でも役割分担をどう持たせるか、仲間との協力とか時間配分を子どもたち自身に考えてもらいながらやったり、幅を持たせた展開ができる活動だと思います。三条自然学校では、写真にあるように、小学校低学年でも包丁を持って野菜を切ったりしてもらっています。右側は、野外

炊事のために火を起こす、原始的な火起こし、マイギリ式の道具を使った火起こしをやっている様子です。なかなか小学生一人で実際に火を起こすまでは大変なのですけれども、集中力とか諦めない心を養うために必要な活動だと思います。

続いて、市民交流事業として取り組ませていただく防災への取り組みについても簡単に紹介させていただきます。三条市に所在があるNPO法人にいがた災害ボランティアネットワークというものがありまして、日ごろ、災害地の現場の支援に追われているNPOなのですけれども、そことこれまでも数多く連携、行動してきた実績があります。そのNPO法人とも協力しながら、地元自治会とか地域コミュニティの方々と協働でさまざまな防災について学べるイベントについても展開していきたいと思っています。ここに名称は入れていませんが、防災デイキャンプ、1日かけての、体育館とかで避難所を想定した防災デイキャンプみたいな事業についても実施が可能だと考えています。

複合施設の特性を生かした取り組みということで、先ほどもわくわく体験キャンプのところでもお話させていただきましたが、同施設一番の特徴、特性でいうと、体験系と芸術系の双方の体験ができる部分だと思っています。左の図でいうと、楕円形の丸の二つが重なっている部分をどう強調していくか、取り上げていくかだと思うのですが、この施設で双方の活動、両面を含めた事業の実施が可能だということで、私たちも力を入れてまいりたいと思っています。その結果、子どもたちの感性や発想を高めることができたり、先ほども紹介したように新しい分野、他方の分野に興味を持つ子どもたちが増えてくれたらいいと思います。

国際交流について簡単に紹介します。西大畑少年センターでこれまで実施されていた総合国際交流事業があったかと思っています。それについても全面的に私たちのほうで引き継がせていただいて、展開していくつもりです。相互交流している学生にとっては、新潟市の文化的特性を生かした体験をしていただいたり、地元の新潟の子どもたちにも新潟の魅力を再発見していただき、郷土愛を育むことにつなげていけたらいいと思っています。地元の方と一緒に事業コンテンツについて整備を進めていきたいと思っています。今の郷土愛にもかぶる部分があるのですが、郷土愛をはぐくむための体験事業の例も上げさせていただきました。これも先ほどから言うように地元の方と一緒に整備していきたいプログラムと、西大畑少年センターですでに実施してきているものもありますので、その辺については引き継いでやっていきたいと思っています。新潟の伝統芸能体験、それから食文化の体験、また、まちあるきを通して新潟のまちの新しい側面を発見するとか、新潟のものづくり体験とか、本当に可能性としてはたくさんある、同施設の立地も含めて、いい場所にたくさんありますので、そういったところを生かしていきたいと思っています。

最後になりますが、冒頭の自己紹介でもお話させていただきましたけれども、私はこの7年間、本当にたくさんの体験活動の指導の場に立たせていただきました。子どもたちの心の状態が変化する瞬間を多数見てきました。私自身、年間50回とか80回とか、たくさんのプログラムを実施する中でトレーニングを積んできた部分もありますし、この7年間で新潟県内の他団体と大きなつながりを持っているところも非常に自負しているところです。そういった面を最大限生かして、同施設の体

験系プログラムに力を入れて実施していきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

続いて、地域世代間交流事業についてです。旧二葉中学校は新潟市内においても由緒正しい伝統校でした。その校舎の有効活用については、地元の方および卒業生は強い関心を持っております。当社はその思いを継承し、再び地域コミュニティ活動の拠点へと進化させたいと考えております。

まず、無料で利用できるキッズスペースを設置します。ここでは地元クリエイターの創作による子ども用玩具を配置し、気軽に体験できる環境工作教室、初めての英会話教室などを行い、親子で毎日来場いただける環境を整えます。また、オーガニック菜園を設置し、地域の方々に開放し、野菜の収穫体験などにも有効活用いたします。

次に、シニア世代との交流活動ですが、コミュニティ花壇として、地元シニアの方が手入れをしてくれた花壇に近隣保育園の子どもたちを呼び、種まき体験を行っていただきます。また、ばかいい教室として、初めてのお茶体験、郷土料理教室、包丁研ぎ教室など、シニア世代による教室活動等を行います。

続いて、稼働の下がる冬期の利用促進についてですが、居場所づくりの一環として体育館の一般開放、学習室の開放を行います。また、今では一般家庭で見ることが少なくなったこたつを期間限定でキッズスペースに設置し、冬場独特のコミュニケーションを楽しんでもらいます。そして、厳冬の2月に二葉感謝祭を開催します。作品公募による市民文化祭、市民プロジェクトによる創作発表、企業とコラボしたワークショップ、障がい者によるアート活動に加え、冬遊びや昔遊び体験、食文化体験など、全館あげて冬期間の利用促進と芸術と体験活動の融合に取組みます。これは、当社の指定管理者施設で行っている感謝祭の様子です。毎年、利用率の下がる2月を中心に行っております。屋内施設はもちろん、一般利用のない屋外施設でも行い、地域の方々よりご来場いただいております。

次に、安全安心への取組みについてです。まず、安全対策の取組みですが、当社は本社に管制センターを有しており、不測の事態に24時間対応が可能です。また、1日4回、チェック表に基づく巡回を実施し、宿泊がある場合については夜間巡回を早朝から深夜にかけて3回実施します。加えて4種類のマニュアルを整理し、それに合わせた研修、訓練を年3回に分けて実施いたします。

続いて災害対策ですが、避難誘導経路を明確にした「新潟市芸術創造村・国際青少年センター地震津波発生時の避難ガイド」を作成して利用者に配布いたします。さらに、避難所として活用していただけるよう、防災備蓄充実を図ります。また、大規模災害によって中核事業が中断することのないよう、現在、当社は、県外業者とBC協定を結び、安全の体制を整えております。

最後に、私たち環境をサポートする株式会社きらめきは、今回の芸術と体験活動の融合という新潟市の意欲的な試みに共感し、長い時間をかけてリサーチを行い、何度も話し合いました。新潟の魅力とは、新潟の文化的アイデンティティとは、市民協働とは、自然、地域、世界との共生とは、そして心豊かな子どもとは。今回、私たちに然りに出した答えがこの事業計画書です。同施設が子どもたちの豊かな心を

	<p>育む、自然、創造、共生の礎になることを心から願っております。 長時間のご静聴ありがとうございました。</p>
中村会長	<p>ありがとうございました。それでは引き続き委員から申請者へのヒアリングを行います。ヒアリングの時間が30分と限られておりますので、最初に、委員から順番に主な質問をまとめていただいて、その後まとめてご回答いただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。 それでは杉浦委員から順番にお願いします。</p>
杉浦委員	<p>プレゼンテーションありがとうございます。小川さんと鳥羽さんの非常に具体的なご提案だったと思いますし、イメージしやすいご提案だったと思います。 その中で文化芸術についてですが、プレゼンの内容は実現するだろうなと思うし、非常に具体的でしたが、そもそも文化芸術に関心のない市民に対して、どのようにアウトリーチをしていくのか、ということ。それから小川さんと鳥羽さんのお二人にお伺いしたいのですが、二葉中学校がああ場所にあって、冬の日本海の吹きすさぶ風とアクセスの悪さを考えると、相当がんばらないと集客できないと思いますが、中央区にある施設ではありますが、8区の方から活用していただくために、主に集客について、何かお考えがあれば教えていただきたい。</p>
中村会長	<p>丹治委員お願いします。</p>
丹治委員	<p>どうもありがとうございました。とても多岐にわたる内容を細かく説明していただいて、この施設をどのように運営されるのか、想像ができてとても良かったと思います。 この施設を運営していく際に、相対化される場所が必要なのかな、と。事業を推進していて、自分たちの事業形態がはたして創造的な形態になるのかどうか。他の施設との連携という話の中で、アーツ千代田3331の事例が出ていましたが、そういったところと連携することは大切だと思う。その先にあるのは相対化だと思う。オリジナリティを持った芸術文化教育活動がされることは、相対化に繋がると思いますが、実際に具体的な連携のあり方であったり、あるいはそれを通してどう事業を相対化していくのか、まだ少し乏しいかな、という印象を持ちました。そこを聞かせていただければと思います。以上です。</p>
中村会長	<p>では梅津委員お願いします。</p>
梅津委員	<p>ありがとうございました。子どもの頃の体験が多ければ多いほど、規範意識が高くなったり、職業意識や人間関係能力が高くなっていきますが、これから大人になって、この日本を背負っていく子どもたちを、どういう風に心豊かに育てていくのか、ということで、私はその人間関係プログラムを重視した点は素晴らしいと思いました。新潟市はもっとこの点について、力を入れるべきだと前々から思っていたので、この点はとてもいいと思うのですが、鳥羽さんが非常勤職員という点で、普段から青少年の居場所になるわけだし、私は鳥羽さんがいつも常駐してくれるといいなと思っています。なぜ、常駐職員はできないのか、非常勤職員なのか、という点を聞かせていただきたいのが一つ。それから青少年三川の自然の森を、平成26年度の閉鎖の時まで指定管理していたということで、その当時、色々と経験なさってきたことを今後、この施設にどう活かしていくのか教えていただきたいと思いま</p>

	す。集客など含めて。以上です。
中村会長	では木伏委員お願いします。
木伏委員	<p>どうもありがとうございました。</p> <p>一点だけお聞かせください。事業計画書の10ページ「文化芸術活動支援事業 年間計画」と14ページ「青少年体験活動推進事業 年間計画」に年間計画を記載していますが、ここに書いてあることは全ておやりになるのか。また、先ほどのプレゼンで説明があった、第4回全国芸術祭りサポーターズミーティングや、にいがた伝統芸能体験なども、ここにプラスアルファでお考えになっているのか、それをお聞かせください。以上です。</p>
中村会長	では小山委員お願いします。
小山委員	<p>ご説明いただきましてありがとうございました。新潟市が始めた水と土の芸術祭を継続されていくと。この継続って色々な活動の中に必要だと思いますし、体験型プログラムというのは、非常によく考えていらっしゃるがよく分かりました。</p> <p>私は、子どもの国際交流活動を25年間やっている団体で、いろいろな企業の方たちや大学生と一緒にボランティアをしています。今のご説明だと、どちらかというと、こういうことをやる、というプログラムが中心のご説明でしたが、私のような団体は、すでに自分たちや大学生と一緒に考えたプログラムがあって、これまでも大畑少年センターとか国立妙高少年自然の家を使わせていただいています。私的なプログラムを持っている団体がどのように活動していけるのか、またその団体に対してどのように協力していただけるのか、というところをお聞かせいただきたいと思います。</p> <p>あと、大畑少年センターを利用する時は、野外活動的なことができないので、妙高や中条を利用しますが、この度、この施設が新潟市にできるということは非常に意義があることだと思います。私たちの団体は、国際交流として、子どもたちに来てもらって、みんなで新潟市を学んでもらいたいという思いもあって活動している団体ですが、その拠点となるということを非常に期待しています。拠点として、市民の持ち込んだプログラムをどのように、アドバイスをしてくださるのかということ。あと、安全性の部分については、先ほどご説明いただきましたが、夜間の管理をしっかりされると思いますので、その辺は安全なのかなと期待しております。</p>
中村会長	<p>非常に楽しそうだな、参加したらきっと楽しいだろうな、というような思いで聞かせていただきました。</p> <p>お聞きしたいのは、割と芸術を重視して、市民や大人の人たちが利用するイメージが湧くし、それから子どもたちに対する自然体験というイメージも非常に湧きますが、小学生ではない中学生や高校生が利用するイメージがちょっと分からなかった。小学生が利用していただくのは、例えば合宿などで利用していただく機会があると思いますが、そういう時は教育活動の一環として利用されるわけなので、その辺との折り合いをどうしていくのか。やはり学校関係と上手くやっていくことが、この施設を使っていただけるかどうかの要にもなるのかと思います。</p> <p>委員から出た話としては、集客ということ、事業の相対化、なぜ鳥羽さんが非常勤職員なのか、プログラムの年間計画の一覧などが出ていますが、全て実施するの</p>

	<p>か、団体さんが自主的なプログラムを持っている時にどのような関わりになるのか、という意見が出ましたが、お答えいただければと思います。</p>
<p>申請者</p>	<p>まず、杉浦委員と丹治委員のご意見については、主に芸術系のご意見になると思いますので、小川から回答させていただきまして、梅津委員の鳥羽が何故常駐しないのか、という点につきましては、資料を見ていただくと分かりますが、鳥羽が現在、NPO団体の理事長をしており、いろいろな活動をしている中で、今回協力していただく流れの中で、ここに専属というわけにはまだいかないという状況です。では、鳥羽がいなければ、この施設が本当に運営できないのか、と言えばそういうわけではなく、先程も言いましたが、鳥羽のネットワークの中で、事業経験のある方の中で多数協力してくださる方がいますし、事業計画書にも書きましたが、アシスタントディレクターを鳥羽の代わりに常駐させて事業に当たらせようと思っています。大畑少年センターの職員を継続雇用ということで謳っていますので、アシスタントディレクターについては、できればその中から出てきてほしい、というのが私たちの希望ですが、残念ながらその中に適任者がいないということであれば、私たちの会社の中の間人で、鳥羽のサブになれる人間を人事異動で動かそうと思っています。具体的には、三川自然の森で事業担当をしていた者であるとか、現在、指定管理している紫雲寺記念公園で年 150 回くらいそういった体験活動をやっておりますので、そのような施設の事業担当をこちらの施設に回そうと思っていますので、まずは鳥羽を非常勤でお願いできればと思います。</p> <p>それと木伏委員から事業計画が分かりづらいというご意見がありましたが、P10 と P14 は青少年系と文化系に分けて事業計画を書いています。ここに書いてあるものにつきましては、当社で主体的に企画を立てて運営するものについて書かせていただいています。先程から言っています、新潟の体験授業だとか、野外体験活動だとか、青少年活動だとか、そういったものについては、どちらかという当社が主体的にこれやりなさいというわけではなくて、お客さんから希望された時にこういうコンテンツがありますよと。こちらの方は逆にお客様の方で希望された時にうちが提供できるコンテンツとして紹介させていただいている、というような経緯でご理解いただければと思います。</p> <p>私の方で答えるのはそういったところで、最初に芸術系につきまして杉浦委員と丹治先生の質問について、小川の方からお答えさせていただければと思います。</p>
<p>申請者</p>	<p>それでは私から杉浦委員と丹治委員の質問にお答えさせていただきます。</p> <p>まず杉浦委員の文化芸術に関心のない市民への関心の持たせ方、アウトリーチの方法等についてです。芸術文化の定義も非常に広いですが、このように考えられるかな、と思っているのは、生活や文化など、例えば衣食住や暮らしに身近なところを切り口にしたアプローチから入っていくのが一つの手法であり、ファッションにしても料理にしても住まいにしても建築デザインにしても、全ては芸術文化と同じ範疇、あるいは色々な見せ方、関心の持たせ方ができると思いますので、水と土の暮らし文化、などという言い方をよくしますが、新潟の独自性を背景にした暮らし文化、そこから関心を寄せてもらえるということも一つの方法かなということ。</p> <p>8 区の方から活用していただくことも含めてですけれども、中央区のあの立地と</p>

	<p>というのは、日本海を望むという、まさに新潟の象徴的なスポットであり、売りだと思ふ。ですけれどもやはり出向いて行ってなんぼというところもありますので、8区につきましては、こちらからアウトリーチの活動を積極的に展開する。特にアーティスト・イン・レジデンス事業で、アーティストが滞在している折は、アーティストがまず新潟を知ることが、まずリサーチの段階から必要ですし、活動に触れてもらうという意味においても、8区全区回るかはさておいて、アーティストには積極的に外に出て行ってふれあい、引いてはこの施設に関心を持ってもらう、足を運んでもらう、という風な展開を図っていきたいと考えております。それと冬場の日本海は本当に厳しいものがありますが、これも一つの考え方で、冬の日本海は確かに車を止めていても揺れるくらい風が強く、夏とは違って、誰も行こうとしないですが、あそこの施設は否応がなく、冬の日本海と向き合っているわけで、その時に「冬の日本海の魅力とはなんだろう」というワークショップをはじめ、冬の日本海をテーマに色々なことを考えることができるのではないかと思います。そして演歌だ、何とかだ、と色々出てくると思ふ。アートというものは、そもそも価値観の転換がアートの醍醐味ですから、冬の日本海をちょっと敬遠したがっていたところが、実は新潟の冬、日本海の最大の売りではないか、みたいになったら面白い。逆手に取る、ではないですけれども、価値観の転換ということで、集客的に難しい時期に、このようなテーマを活用していきたいと考えております。</p> <p>次に丹治委員からの質問で、連携の具体化と相対化を経た、それ以降のオリジナリティをどう出していくのかについてですけれども、確かに連携というのは、言うは易しで、実態はどうなのかと言ったら様々あると思ふ。やはり本来の意味での連携というのは、共に進展していくということだと思いますので、例えば、アーツ千代田みたいな先進的な事例とノウハウと、様々な学ぶべきところが多いところにつきましては、願わくば、共同プログラムを開発するような形で企画を一緒に立てると。そしてより現実的で、互いにとって効果がある連携のプログラムをやっていくというのが理想形ではあります。そのためにどうしたら良いのかというのがありますが、具体的には相互に開発していくようなプログラムを立てていくということ。そしてその先にある相対化と新潟のオリジナリティですが、やはりこの施設のそもそもの立脚点、スタート地点は、私どもの考え方では、水と土の芸術祭、新潟のアイデンティティを揺るがぬ軸足にしていこうという考えがあります。どんな分野を取り上げても、誰とコラボレーションしようと、新潟のアイデンティティ、新潟の歴史・自然・市民、ここを軸足にしている限りは、自ずと新潟のオリジナリティがにじみ出てくるものに繋がっていくのではないかと思っています。ちょっと抽象的なお答えになるかもしれませんが、新潟のアイデンティティに軸足を置きながら、それがより伝わる、具体的に伝わるような成果の見せ方を意識していきたいと思ふ。</p>
<p>申請者</p>	<p>ご質問いただきましてありがとうございました。</p> <p>まずは小山委員からいただいた国際交流プログラムの件ですが、確かに自主プログラムをお持ちの団体さんとか、中には個人の方も多数いらっしゃると思ふ。また、現時点で、そのような団体を私たちの方で把握し切れてない、というところ</p>

が正直ありますので、そのような方たちと、まずは接点を持つところから始めるしかないかなと思っています。既存の団体が素晴らしいプログラムをされているのであれば、是非それはそれで継続していただきたいというのがまず一番の思いでございます。会場探しに困っているとか、集客のためにチラシ製作や配布で困っているようなことがあれば、会場としてお貸しするとか、逆に私どもが発行するチラシに国際プログラムコンテンツとして、一つ入れさせていただくとか、私たちの施設と協働、共催という形でやれるということであれば、そのような形でやっていく、というやり方もあるかと思っています。

先程のプレゼンの中で、三条自然学校でも連携して行っているプログラムがいくつかあるとお話ししましたが、持ち込み企画が結構あります。オリエンテーリングや、こういうことをやっているんだけど、三条自然学校のプログラムとして、ぜひご協力いただけませんか、ということで色々打ち合わせさせていただいて実現したのもあったりします。まずは今把握できてないそういう団体さんの把握、つながりを作るところから始めていきたいと考えています。

青年の利用についてですが、私から説明させていただいた部分の二葉アドベンチャーのところは、基本的に小学生だけをイメージしているわけではありません。妙高青少年自然の家でも中学校、高等学校からかなりの学校が利用に入られていると思います。中学生ならではのチームビルディングや人間関係づくりプログラムの展開の仕方もありますし、高校生も立派な大人ですけど、高校生が対象であれば、その対象に合わせたプログラムの展開もあります。小学校だけでなく、中学校や高校も含め広くPRをしていき、施設利用及びそのプログラムの選択をしていただけたところまで力を付けていければいいな、という風に考えています。

その上で、教育関係とどのようにつながって上手く活用していくか、というところは、現時点ではなかなか具体的に申し上げられるところもないのですが、その辺についても、外に出て行くしかないと思います。プロジェクトアドベンチャージャパン本部が主催しているワークショップの中では、学校の教員を対象としたワークショップなども行われています。まずは学校の先生や、学校の責任者の方が、人間関係づくりプログラムの意義を知ってもらわないと、「あそこの施設に行ってみよう」という話にならないと思うので、何らかの形で学校の先生方や校長先生が集まる場に出て行き、施設のPRや二葉アドベンチャーの意義についてお伝えさせていただく。これまで妙高に行っていた学校も含め、二葉アドベンチャーの方に来ていただければいいな、と思っています。その状態になるまでどれくらい時間がかかるか分かりませんが、そういう方向でやっていけたらと思っています。

最初に杉浦委員から質問いただいたところですが、体験系の活動については、冬の集客というのがなかなか難しいところであって、私が現在所属している、さんじょう自然学校は完全に積雪をするので、スノーシューハイキングや冬のアクティビティも設けやすいのですが、二葉だとスノーシューハイキングができるほど雪は降らない。風は強い、という話なので、どうしても室内でのプログラム展開になると思いますが、室内でしかできないことも逆にあると思いますし、芸術系同様、日本海の風がどこまでかって、正直私も今年度の冬を体験してみないと分からないとこ

	<p>ろもありますが、冬の風を活かしたアクティビティみたいなものもオリジナリティを高めていく中で設けていくこともありかと、少し楽しみにしているところでもあります。</p>
中村会長	<p>今一通りお答えいただきましたが、さらに付け加えて質問などありますか。別な視点の質問はまたこの次に出してもらおうと思いますが、今のご回答でよろしいでしょうか。</p> <p>先ほど小山委員の方から「安全」みたいなワードが出てきたかと思いますが、そのあたりの追加の質問はよろしいでしょうか。</p>
小山委員	<p>はい、色々資料を拝見させていただいていますが、一つ加えるならば、施設管理における安全性というか、逆にこのような青少年施設は、利用者側に責任を持たせるということが非常に大切なことだと思っています。我々が他の施設を利用しても、例えば野外炊飯の道具を、自分たちできれいに片づける指導が施設側からあったりしますが、利用者への指導というかアドバイスをどのようにされるのか関心がありました。</p>
中村会長	<p>いかがでしょうか。</p>
申請者	<p>今の件について、妙高青少年自然の家はたぶん日本で一番厳しいと言われている施設ですが、今お話しいただいたように、基本的には利用者側が責任を持って安全に使う、使った道具はあった場所に同じような状態にして戻す、ということが基本かと思っています。学校などの利用団体であれば、事前に打ち合わせする機会もあると思いますので、打ち合わせの中で、施設の決まりや使用上の注意事項をしっかりと引率者に伝えさせていただいて、当日私たちが指導者として入る場合であれば、参加している子ども達に説明する形を取りたいと思います。</p>
梅津委員	<p>一点よろしいですか。先ほど鳥羽さんが非常勤職員であることにこだわってしまってすみませんでした。私が言いたいのは、この施設は社会教育施設であるということで、教育施設なのです。普段から自由に子どもたちも出入りするし、さらに高齢者の方や赤ちゃんをもった親御さんも来る、そういう時に対応してくださる方が、社会教育施設であるということをしかりと認識されて、そして可能であれば社会教育主事資格を持っている人、あるいは学校で務めた経験があって、教育ということに非常に詳しい方、そういう方が入っていただけないものかと。いかがでしょうか。</p>
申請者	<p>事業計画書に記載しましたが、館長については教員資格を持たれた方で、英語能力のある方を予定しています。</p>
中村会長	<p>よろしいですか。他にいかがですか。</p> <p>ちょうどいい時間だと思いますので、これで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。</p> <p>これでプレゼンテーション及びヒアリングを終了いたします。なお、評価の結果については後日事務局よりご連絡いたします。</p> <p>申請者の皆さまはご退席願います。</p>
	<p>～休憩～</p>

<p>中村会長</p>	<p>それでは時間になりましたので、プレゼンテーション及びヒアリングの開始となります。</p> <p>事務局は申請者を入室させてください。</p>
	<p>本日はこのような発表の機会をいただきまして、関係者の皆様方には厚く御礼申し上げます。</p> <p>私から、今回、応募させていただいた、にいがたみらいズプロジェクトについてご説明させていただきます。</p> <p>当愛宕商事及び新潟ビルサービス、グリーン産業の3社は新潟市内において多くの指定管理事業を強固な信頼関係に基づく運営責任を共有し、共同事業体として誠実に履行させていただいております。今回、本施設の公募にあたりましても、我々の実績と新規施設を立ち上げた経験を生かした運営ができないか。本施設の経営段階から連携して検討を重ねてまいりました。その検討の中で、本施設の基本理念である青少年健全育成、文化芸術活動プログラム展開、アーティスト・クリエイターの育成の理念を実現させるためには、我々3社を補完する専門知識、経験、意欲を兼ね備えた法人の参加が望ましいとの結論に至りました。その結果として、教育分野での事業実績を有するNPO法人みらいず works と、文化芸術分野でのイベント開催実績を有する株式会社けんと放送の2法人を加え、にいがたみらいズプロジェクトを発足して応募させていただきました。</p> <p>NPO法人みらいず works は、新潟市をはじめ近隣市町村において青少年のキャリア教育推進事業を行政と一緒に実践してきた実績があり、このコンテンツは本事業において必ず花開くものと確信いたしております。また、けんと放送は、新潟市万代島旧水揚場跡地の「CUT IN PARKイベント」を新潟市と一緒に実施し、2,000名を超える人員を動員した実績があり、本施設における市民交流事業では大きな力を発揮していただけるものと期待しております。</p> <p>当グループ構成法人は、すべて地元新潟市に本社、本部を置き、地元新潟市を愛し、新潟市とともに歩んでまいりました。地元新潟市への思いは行政施策の強力な推進役である指定管理者にとってはなくてはならないものであると考えます。なお、当グループの運営基本原則として、各法人代表者が現場任せにしないで、直接運営に関与し、スピーディーや意思決定が行われる体制としており、この思いは私ども各代表者が共有しております。必ず月1回、施設管理物件で代表者会議を開催して、任せきりにはしていないということでございます。我々、にいがたみらいズプロジェクトグループはこの思いを、本施設の指定管理業務にぶつけ、オール新潟で業務に誠実に取り組んでまいります。</p> <p>続いて、各事業計画をご説明させていただきます。</p> <p>経営理念からご説明いたします。指定管理者にとって最も大切なことは、指定管理事業を単なるビジネスにとらえず、行政に代わって行政施策を推進する推進役であるという認識を明確にすることだと思っております。市民の大切な財産をお預かりし、その財産を有効に活用すること。利用者である市民が安心して安全に利用できる体制を確保・維持すること。この2点は絶対に忘れてはならないものと認識しております。そのためには、行政が本施設運営者に求めるものを理解することが重要です。</p>

当グループは今回の応募にあたり、本施設の設置目的、施設の基本理念だけではなく、現在、行政が推進している「にいがた未来ビジョン」、「新潟市教育ビジョン」、「新潟市文化創造都市ビジョン」についても理解を深める努力を行ってまいりました。

その結果として、ここに掲げる4方針を基本経営理念といたしております。冒頭で説明がありましたが、当グループ構成各法人はいずれも地元新潟市に本社、本部を置く法人のグループです。私たちは本事業の経営理念4方針を共有して、オール新潟で事業に取り組んでまいります。当グループは経営理念4方針を踏まえ経営方針を定めました。中でも、芸術創造村と国際青少年センターの2施設それぞれの役割、特徴を理解して、複合施設としての特性を最大限に生かし、施設名は今回の事業に対しての大きな課題であり、私たちは両施設とのシナジー効果を発揮できる施設名を行います。また、新規開業施設であることを踏まえ、業務経験や能力を判断したうえで開業準備も含め安心できる運営体制を構築いたします。具体的な配置計画につきましては、後段の組織体制で別途ご説明させていただきます。

当グループ構成団体である愛宕商事、新潟ビルサービス、グリーン産業の3社は、他の指定管理施設において新規開業を経験してまいりました。この経験を生かし、本市施設が順調に開業できるよう、新潟市と協議のうえ、ここにお示したようなスケジュールで基本的に作業を進めてまいります。なお、指定管理者決定後、速やかにグループ代表法人である愛宕商事本社内に開業準備室を立ち上げ、新潟市と連携し準備を進めてまいります。

次に、施設の平等利用、利用促進、利用者ニーズの把握についてご説明いたします。当グループはここに掲げる項目を基本方針として、施設の平等利用の確保に取り組んでまいります。特にニーズの把握は当然のことですが、私たちはその先にあるウォンツを引き出し、できる限り対応してまいります。また、指定管理者として条例、規則を遵守し、減免処置に関しても新潟市と協議のうえ、減免基準を公表するなど、適正に対処してまいります。さらに、ユニバーサルデザイン推進行動計画に基づき、親切、丁寧な対応を心がけ、開館時間や休館日等の変更は館内表示やホームページなどで適切に、確実に告知いたします。

利用促進の入口はまずニーズの把握であると考えます。利用者拡大のためには、1「顕在、潜在ニーズの把握」。2「そのニーズの反映」。3「ニーズの先にあるウォンツの開拓」。4「リピーター確保」。この4点が重要と考えます。ニーズ把握の具体的な方向に関しては、事業計画書4ページに記載しております。本施設に限らず、新潟では冬期の集客が大きな課題です。当グループは施設の特性を生かした体験活動プログラムや、宿泊体験を地域や連携団体のお力をお借りして企画、実施して、冬期の集客に努めてまいります。また、施設の利便性を向上させるため、当グループは指定管理者予算内でW i - F i 環境を整備いたします。外国人アーティストへの支援も鑑み、必要事項であると考えております。お客様からの苦情は施設運営改善や新規顧客獲得のチャンスととらえ、要望、苦情に対応するマニュアルを整備し、ニーズにお応えしてまいります。

市民との協働、地域の連携についてご説明いたします。事業計画書は5ページか

ら6ページをご覧ください。当グループは市民、地域と密接に連携し、地域に愛される施設づくりを最重要課題と考え、ここにお示した施策を実施してまいります。当グループが運営方針に掲げる文化芸術を愛しむ市民と生きる力を育む青少年が行き交う場の創造の実現には、市内の広がる文化芸術団体、青少年育成団体、各地域ボランティア団体、地域コミュニティ、企業、大学等の交流連携が不可欠です。私たちは、本施設がこれらの活動団体とその結節点になり得る企画を行うことにより、各団体が連携することによるシナジー効果を生み出せる事業を行ってまいります。具体的な提案といたしましては、一つ、アーティストと市民や子どもたちがふれあうことのできるコミュニティスペースとして、1階ラウンジを利用して市民アートサロンを運営いたします。このスペースでは飲料等の自動販売機を置き、リクエストがあればケータリングで食事の提供も行い、くつろぎ、ふれあい、交流できるスペースとして、子どもから高齢者までだれでも気軽に訪れていただくサロンを目指します。二つ目として、本施設のサポーターズ組織を地域や団体のご理解をいただきながら設立します。当グループ法人は他の指定管理施設においてさまざまな皆様からご協力をいただいております。

事業計画書の5ページにその実績の一部を記載させていただきましたので、ご覧ください。本施設において、我々はそのノウハウを生かし、たくさんの皆様にご参加いただき、運営のサポートをいただきたいと思いますと考えております。三つ目にエリア文化への協力として、現在、活動している異人池の会に本施設も入会させていただき、エリアの文化活動に貢献してまいります。また、サクラリーにも積極的に連携して参加いたします。さらに、他指定管理施設において連携させていただいている大学、専門学校のボランティアとの良好な関係を本施設の運営にも生かしてまいります。

事業計画書の6ページに、他の施設において連携している実績を記載させていただきましたのでご参考いただきたいと思います。

続いて、文化芸術活動支援事業についてご説明いたします。事業計画書は7ページから10ページです。文化芸術活動支援事業は、1「アーティスト・イン・レジデンス事業の企画・実施」。2「市民交流事業の実施」。3「水と土の文化ギャラリーの企画・実施」。4「それらに伴う付帯事業」となっております。当グループはこの基本仕様に指定管理者としての新たな工夫を加え、着実に事業を実施してまいります。

まず、アーティスト・イン・レジデンス事業についてご説明いたします。全国的にもアーティスト・イン・レジデンス事業に取り組んでいる自治体が増えてまいりました。そのような状況の中でも、アーティストの招へいにはかなり苦労しているとのお話をよく伺います。当グループは全国的な成功事例を参考に、新潟市をはじめとしてさまざまな皆様のご意見を伺いながら、この事業に果敢にチャレンジしてまいります。滞在アーティスト募集に関しましては、魅力的な一つであることを知っていただくために、施設をブランディングして効果的にPRいたします。具体的には、施設の紹介だけでなく、周辺地域情報、郷土料理、季節写真や観光情報なども加え、アーティストが新潟で創作活動がしたいと思っただけのような内容をSNSや、地域は限定されますが、当グループ、けんとう放送の電波媒体等も利用

し積極的に情報を発信してまいります。なお、公募要項は当然のごとく、日本語、英語の両用併記にて作成いたします。招へいアーティストの選定に関しては、新潟市、アーツカウンシル新潟のプログラムディレクターと当グループにより協議させていただき、アーティスト・イン・レジデンス選考委員会を組織して対応いたします。なお、当グループの運営顧問として県立美術館館長経験者にご参加いただき、ご助言いただくなど、運営に積極的に関与いただく予定となっております。また、公募・選定を円滑に進めるため、お示しいたしました公募要綱案を提案させていただきたいと思っております。

中でも、7項目の、滞在中に市民とどのようにふれあいたいのかとの質問が交流事業実施にあたり参考とさせていただきたいと思っております。アーティスト滞在中は英語担当な職員がボランティアと連携して、快適に搜索活動に取り組める環境を作ります。また、全職員がコンシェルジェの意識を持ち、さまざまな要望にできる限り対応してまいります。市内の情報収集に関しては、当グループ全法人のネットワークを利用し、最新情報をお伝えします。さらに、Wi-Fi機能を整備して、SNS環境にも配慮いたします。滞在アーティストと市民との交流に関しては、交流がコミュニケーションのみに偏らないように、ここにお示しいたしましたように、市民交流、地域の文化芸術団体交流についても、目的や意義を明確にした企画を適宜実施してまいります。

水と土の文化ギャラリーの運営についても、作品展示会を展示方法なども工夫しながら企画・開催いたします。また、工房等を使用していない期間には、広く市民の皆様にご利用いただけるように空室状況を告知するなど、市民アートスタジオとして利用促進を図ります。当グループの展示企画等の実績を事業計画書9ページ、10ページに記載しておりますので、ご覧いただきたいと思います。

次に、本事業の二つ目の大きな柱である青少年体験活動推進事業に関してご説明させていただきます。事業計画書は11ページから14ページです。当グループ構成法人は新潟市アグリパークにおいて新潟市教育委員会のご協力をちょうだいしながら、アグリ・スタディ・プログラムを平成26年度から事業を開始し、平成28年度実績では新潟市内189校、9,635名の児童生徒を受け入れるまでになりました。また、みらいず works は「未来にふみ出す学びを子どもたちへ」をテーマに、学校支援やキャリア教育企画に積極的に取り組んでおります。本施設の役割として、家庭や学校とは異なる場所でさまざまな活動を体験することにより、次世代を担う心豊かな子どもを育てる施設とあります。当グループはその目的を達成するため、ここに掲げた4項目を基本として、子どもたちが体験を通して集団で課題を解決し、生き抜いていく力を育成するプログラムを実施いたします。本施設を利用される団体様は目的や日程が異なります。私たちは利用団体がその目的に合致しやすいようにプログラムを区分して提示し、ウィングを広げた対応をさせていただきます。ここに、利用団体向けプログラム例を区分、内容、ねらいを掲げて記載しております。

人間関係づくりプログラムは、施設における青少年体験活動推進事業の基本となる課題です。人間関係づくりプログラムの目的は体を使いながら集団で課題を解決

する活動を通じて、挑戦、協力、葛藤、達成感などを体験することで自己肯定感を高めるとともに、仲間との信頼関係を築くことです。当グループはこのねらいを各種プログラムに散りばめ、重点的に実施してまいります。

私たちが企画運営する個人向けプログラムは、大畑少年センターで実施している体験活動を基本的に踏襲し、さらに新しい取り組みを行いながら、広く募集してまいります。お示したプログラムの中にも、先ほどご説明した人間関係づくりプログラムを盛り込んでおりますので、ご覧ください。また、市民交流やサポーターズ制度の導入にも取り組んでまいります。さらに、児童生徒が心地よい居場所として感じてもらえるよう、青少年の心やすらぐ居場所に本施設が位置づけられるように、安全には細心の注意を払いながら運営いたします。

青少年の豊かな心や知恵を育む体験活動学習について学ぶ講座を開設いたします。この講座は各種団体や企業と連携し実施させていただきますが、体験学習指導者としての役割意外にも、社会人としてのスキルアップにもつながるものと考えており、広く参加者を集めてまいりたいと思います。講座修了者には修了証を発行し、指導者登録をお願いして、本施設の運営にもご協力していただけるようご理解をいただいております。新潟市内にある教育型施設はともすると幼稚園、保育園、小学校を対象にした子ども向け施設が多く、その上の世代の利用がなかなか難しい施設となっているのではないのでしょうか。本施設は国際青少年センターという施設名でもあり、私たちは自主事業としてここに掲げる中高生の居場所づくり、市民アート事業、プロジェクト型学習など、その上の世代にも訴求する事業を自主事業として実施してまいります。なお、この事業は当グループみらいず works が精力的に取り組んでいる事業であり、先日も新潟日報紙面にて大きく取り上げられました。

次に、複合施設の特徴を生かした取り組みについてご説明いたします。事業計画書 15 ページ、16 ページでございます。本施設は異なる機能を持つ二つの事業が一つの建物に融合されているまれな施設です。ここにお示した図をご覧ください。芸術創造や国際青少年センターに訪れる利用者はそれぞれ目的が異なりますが、それぞれの矢印が結合する部分、黄色の部分に焦点を当てると、おのずと企画の方向性が見えてきます。芸術創造村に訪れる目的の業者は、青少年センターに立ち寄ることはまれですが、青少年センターに訪れる利用者は必ず芸術創造村に立ち寄ることになります。この相互の互換性を生かし有機的な企画やイベントを行います。これらの企画の実施にあたりましては、新潟市と協議を行い、ここにお示したような各種企画を行ってまいります。

事業計画書 16 ページをご覧ください。当グループは設置目的の違う施設の事業連携を複数経験しております。その経験が本施設の運営にも生かせるものと確信いたしております。

次に、情報発信、国際交流、広報についてご説明いたします。私たちは、広く市民に対して当施設の存在、事業内容を知らしめるべく、お客様の情報ニーズ、情報リテラシーに対応した適切なメディアミックスによる効果的な広報宣伝活動を展開いたします。限られた予算の中で、最もお客様と情報接触率の高い手法を選択し、

効果的な情報発信を行ってまいりたいと思います。具体的な方法としましては、そこに書かれているweb、SNSを活用したターゲットを絞った広報活動。FM・KENTOラジオスポットを活用した情報発信。また、フリーペーパー「CUT IN」、みらいずBOOKの活用。これは、新潟のさまざまなカルチャーをさまざまな角度から情報発信する20代向けフリーペーパー「CUT IN」が、新潟で働く大人と出会い、自分らしい未来を見つける中高生向けキャリア教育マガジンみらいずBOOK。これらを活用し、新世代、若年層に対しても積極的に情報発信してまいります。

続きまして、ホームページによる情報発信についてご説明いたします。充実したホームページは新潟のみならず、世界への情報の窓口となります。ここに掲げているサンプルは、ほかから持ってきたサンプルではなく、私たちが国際青少年センターのwebサイトを実際に立ち上げたことを想定しデザインしたサンプルです。この中では、各種の情報を流していくこともございますが、基本情報の中では開館時間や休日病院の案内、貸館の予約状況など、適時にアップしてまいりたいと思います。なお、全ページではございませんが、外国人向けに英語バージョンのホームページも掲載させていただく予定であります。

次に、魅力的なイベント、講座、ワークショップの実施。私たちは若者たちへも情報発信をしてまいります。特にユース・カルチャーは情報を拡散し、海を越えて世界にまで施設の魅力を発信する重要なファクターであると考えますので、この層へ向けた発信も行っていきたいと思っております。また、私ども法人が有しているさまざまなネットワークを活用して情報を広めてまいりたいと思います。こちらに、文化芸術のネットワークの一例を記載させていただいております。このネットワークを活用しながら順次進めていきたいと思っております。

続いて、施設の管理運営、予算の執行、管理経費の削減の取組みをご説明いたします。無理、無駄のない実現可能なコスト管理計画により、管理経費の削減を行います。当グループ各本社や他の管理施設と連携し、大きくパイを共有する効果により購入コストの削減を図っていきます。また、具体的な削減例といたしましては、その図でお示ししましたが、ポスターの作成等に関してもできる限り経費差の削減に取り組む姿勢で臨んでまいりたいと思っております。

続いて、こちらのほうが私どもグループの管理運営実績でございます。このページでございますが、愛宕商事、新潟ビルサービス、グリーン産業の三社が管理している施設の主な一例でございます。上のほうに、文化芸術、展示関係の施設。下段には、教育自然環境学習、宿泊関連の施設を設けております。

次のページに関しては、関連委託事業の実績ということで、みらいず works とけんとう放送の実績を載せております。教育関連業務委託表に対しては、みらいず works が精力的に取り組んでいる事業です。下の地域活性イベントに関しては、けんとう放送が取り組んだ実績を書かせていただいております。また、私ども各事業法人は事業計画書の22ページ、23ページに記載しているとおり、各法人との強固な財務体質を持っております。各社とも健全な経営体質でありますので、安心して事業運営を行っていただける体制となっております。

次に、運営体制についてご説明させていただきます。施設の運営者として、私どもはここにお示ししております4項目を大きな柱として実施してまいります。事業計画書は24ページから27ページに記載しております。具体的な取組みをいくつかご紹介いたします。まず、冒頭で当社高橋からも話がありましたとおり、私どもグループは各法人の代表者が筆頭として、全部の運営法人が運営責任を共有して事業にあたります。その方針として、各代表者でなるにいがたみらいプロジェクト事業運営統括本部を設け、代表者によるにいがたみらいズプロジェクト運営会議を毎月開催いたします。この会議の趣旨は、実際、各館長、その他にもある程度の権限はお渡ししますが、不測の事態、予算面での修繕、安全面等で大きな課題が発生する場合、瞬時にグループ全体としての意思決定を行い、運営に空白を開けないように行ってまいります。また、開業準備を行うため、資格、経験等を考慮しながら、現在、雇用中の職員を中心に配置し、資格、経験等も踏まえながら開業準備にあわせて、円滑に開業できる体制をとります。提案書24ページに、現在、配置する予定の職員を記載させていただいております。

3番目として、効果的な業務運営を行うための情報共有ということです。当施設は限られた人員の中で業務を行っていかなくてはならないため、すべての職員が担当業務以外も連携して積極的に業務を行える体制としております。そのため、毎月必ず全員が情報の共有を行う統括運営会議。これは先ほどの事業体の会議ではなく、館の統括会議です。責任者会議を設けて実施いたします。この大きな趣旨は、勤務シフトの作成でございます。限られた人員でございますので、貸館状況、イベント状況等を勘案しながら、勤務シフトを作成して、適正な人員が毎日対応できる体制を作るための会議でございます。

組織図をご覧ください。提案書にも記載させていただきましたとおり、本事業は大きく三つの柱がございます。文化芸術、教育関連、施設管理です。それぞれに経験豊富な責任者を配置しながら、それを統括館長が管理するもと、会議を開催しながら情報を共有していくというスタイルで組織を作っております。また、安全安心への最新の対応といたしまして、研修も適宜実施してまいります。1番は、施設の管理者としての研修、安全面、接遇面、マナー面でございます。2番目は、当施設の指定管理。まず、芸術関連、一例を挙げれば、外国語研修。青少年体験事業に関しましては、指導者研修ですとか調理研修。こういった施設の特徴である研修もOJTも含みながら計画立てて実施運営をしてまいります。

次に、ワーク・ライフ・バランスの推進についてお話しいたします。私たちは職員満足度が顧客満足度に比例するという信念に基づき、各法人が経営戦略の一環としてワーク・ライフ・バランス推進に取り組んでおります。今事業においても、その意欲を持って取り組んでまいります。

次に、安全対策についてご説明します。施設の安全確保は指定管理者にとって最も重要な要件の一つです。消防、救命、防災の各訓練を年間2回、2回、1回という頻度で、最低この回数で実施し、普段からその意識づけを行ってまいります。また、私どもの構成法人の新潟ビルサービスは、本施設から約10分程度のところにありますが、こちらの365日24時間体制の管理センターでは、いつもこの施設

	<p>を見守り、緊急な対応ができる体制を構築しております。</p> <p>次に、環境保護の取組みについてご説明いたします。新潟市環境基本計画を遵守し、環境事業に対しては各種取組みを行ってまいります。具体的一例といたしましては、そこに掲げている本施設の特性でもあるアーティスト創作活動に鑑み、アーティストが使ったごみを可能な限り再利用して、ジャンク・アートやグラウンド・アートとして、子どもたちの創作活動に活用いたします。ここにお示ししているエコガラスアート体験は、私どもが実施しているふるさと村の中でも人気の体験事業となっております。</p> <p>次に、社会貢献活動についてご案内いたします。個々に掲げているとおり、私どもは新潟市のこども創造センターやアグリパークにおいていろいろな活動支援を行っております。具体的活動内容も記載しておりますので、ご覧いただければと思います。また、アグリパークにおきましては、地域連携ということで、地区のコミュニティ協議会の皆様と団結して、芸能祭やどんど焼きという文化芸能を継承する事業も協力して取り組んでおります。</p> <p>こういった経験を参考にし、本施設においても地域の皆様への内覧会や交流会を実施したり、二葉コミュニティハウスとの連携で今実施されている日和山まつりと連携しながらイベントを行います。また、11月3日文化の日を地域還元イベントの日として、新潟市芸術創造村・国際青少年センター合同文化祭（仮称）を企画し実施してまいります。</p> <p>次に、事務の適正な執行、関係法令の遵守についてご説明いたします。指定管理事業が大事な市民財産をお預かりして運営する事業でございます。利用者からちょうだいする使用料金はすべて公金であり、適宜、規則に準じ納付させていただきます。私どもはほかの施設におきましても、事務マニュアルを整備し、現預金の管理、多重確認体制を取りながら、各施設において事務事故の実績は一例もございません。また、個人情報の取組みに関しましても、たくさんの個人情報をお預かりする中で、各法人は個人情報マニュアル、コンプライアンスマニュアルを整備しております。本施設におきましても、本施設なりの個人情報マニュアルを定め、情報漏えいを防いでまいります。また、提案書には記載しておりませんが、情報公開に関しても適正に対応してまいりたいと思っております。自己評価も、私どもとしてはきちんと行ってまいります。セルフモニタリングということで、自分たちがやれるモニタリング内容のステップ1、ステップ2、ステップ3という形で表記させていただきましたが、こういった取組みを行いながら、PDCAを回しながら事業に取り組んでまいりたいと考えております。</p> <p>走りばしりではございましたが、ふつつかな説明で申し訳でございませませんが、以上で私どもの事業計画のご説明を修了させていただきます。ありがとうございました。</p>
中村会長	<p>ありがとうございました。それでは引き続き委員から申請者へのヒアリングを行います。ヒアリングの時間が30分と限られておりますので、最初に、委員から順番に主な質問をまとめていただいて、その後まとめてご回答いただきたいと思いますのですが、よろしいでしょうか。</p>

	<p>それでは杉浦委員から順番にお願いします。</p>
杉浦委員	<p>ありがとうございました。事業計画書の5ページの下のところ、市民との協働やサポーターを増やしていく、ということについて書いてあります。今までの運用実績で、子ども創造センターが27団体、アグリパークが31名と書いてありますが、これが皆さんにとっては十分にサポーターズとして機能している人数だと評価しているのかということと、芸術創造村・国際青少年センターではどれくらいのサポーターが想定されているか。それから非常に高齢者が多い地域だと思いますが、今ご説明いただいたプレゼンテーションで青少年には結構いいと思いますが、そこにどのように高齢者に配慮した事業というのを展開していくのか。アウトリーチという視点で二つお伺いできればと思います。</p>
丹治委員	<p>ありがとうございました。資料も相当枚数も多く、丁寧な説明、内容も細かいところまで配慮されて、具体的な部分に知見が及んでいるなという思いに至りました。</p> <p>私の方から質問が二点と、それから質問というより意見になるかと思いますが、その三点を後でお答えいただければなと思います。</p> <p>まずはいくつか具体的なプログラムが出てきましたが、例えば芸術創造村の運営にあたって、他のレジデンス事業を参照したとお話を伺いました。そのような中で、このプログラムが前に進む時に参照しただけでなく、協働もありうるのかなという、質問が一つ。</p> <p>もう一つは、芸術創造村がともすると子ども創造センターと類似性が多分に出てくると思いますが、その差別性というのは、どの辺に求めているのでしょうか。子ども創造センターにおいても、アーティストが入ってワークショップ等を実践されています。やっぱりレジデンス事業が主とはいえ、アーティストが入ってワークショップ等を行う際に、子ども創造センターとの差別化はどのように行うのか。</p> <p>これは質問というより意見になりますが、意思決定する中で現場に任せず、会社が介入し、何か問題が起こった時の対応を瞬時に行える、というお話がありました。他の領域が別の視点を紡ぎ出すことによって事業そのものが活性化していく。自分たちの行っている個々の事業の相互乗り入れではなく、もっと別の視点で事業の効果なり問題点、もっと言うと市民県民のためになっているのか、という問題点を浮上させる一つの核みたいなものがあるのもいいのかなと。</p> <p>質問二つと、最後は意見になりましたが、お聞かせいただければと思います。以上です。</p>
梅津委員	<p>これから学校単位で使われると思いますが、中条の少年自然の家まで行かなくても、新潟市で自然体験が出来るということで、この施設に子どもたちが来て、そして自然体験をやるわけですが、このような時に指導者になる人がいるのかどうか聞きたいです。以上です。</p>
木伏委員	<p>どうもありがとうございました。いただいた事業計画書で一番興味を持ったのが14ページです。自主事業の提案の(1)の「中高生の居場所づくり事業」というのがありまして、その中に「大学生ジブントーク」というのがありますが、これの具体的なやり方、内容。それと、今までこの企画の実績があったかどうかという</p>

	<p>こと。最後にこれは範疇外かもしれませんが、学校に行けない子をこういった場合に呼び込むことは非常に大きな社会貢献だと思います。また地域貢献だと思います。もし素案がございましたら教えていただきたいと思います。以上三点でございます。</p>
小山委員	<p>ご説明いただきましてありがとうございました。それぞれの施設と連携が取れるというところに非常に安心して活動できるのではないかと思います。</p> <p>アーティストを広く公募する、というのが最初にご説明ありましたが、アーティストというのは、どこから誰を連れてくるイメージなのかお伺いしたいのと、先ほど質問があった自然体験が新潟市内でできることになりますので、それを主とする方ももちろんですが、その管理をどのように行っていくか。野外炊さんであったり、そういった今までにない施設が新潟にできるので、その管理、使い方をどう利用者に指導していくのか、ということをお聞かせいただければと思います。</p>
中村会長	<p>ありがとうございました。色んな点でご配慮いただいて、ご提案いただいたなと思いました。</p> <p>私としては、先ほど丹治委員から意見がありましたが、現施設との差別化、もちろんプロジェクトが違いますが、その辺の独自性というのはどういう所にあるのかなお聞きしたいと思いました。</p> <p>あと、教育面は実績があるということはとてもよく分かりましたが、アートの部分についてです。例えば館長は美術で中学校の校長の経験者という形で、かなり具体的に書いてありますが、人材の当てがある中で書いているのか。アートの部分について、もう少し聞かせていただきたいと思います。</p> <p>非常に質問の幅が広がって、市民との協働であるとか、レジデンス事業の協働、それから現施設との差別化、それから指導者等とか、居場所づくり、アーティストの問題、自然体験等出ましたが、どれからとは言いませんので、説明いただけたところからいただければと思いますのでよろしくお願いします。</p>
申請者	<p>まずは中村委員から話がありましたように、アートの部分についてです。正直申し上げて、私どもも体験学習と教育自然体験学習の実績については、かなりあると自負しております。ただ、私どもが今少し不足している知識や経験は芸術、アートの部分だと思っています。先ほど別の委員からもご質問がありました通り、本日説明に来ております浅井は現・こども創造センターの館長でございます、唯一アートの造詣があるということだけで、今後行っていく運営については、正直申し上げて不安がないわけではありません。ただ人材的には、私どもも学芸員もおりますし、そういった人員を入れながらアートに対して取り組んでいくことと、それから組織体制に関しては、先ほどお示ししたのはベターではなくマストとお考えいただければと思います。すでに私どもの内部の職員については、本人の理解をもらいながら内示を出している状態です。仮に指定管理者に選定された場合、開業準備も含めて、個々の部署に異動してもらうことは伝えてございます。</p> <p>次にサポーターに関しまして、こども創造センターの件については、浅井からご説明させていただきます。</p>
申請者	<p>こども創造センターのサポーターズは、シルバー世代の方とかお母さん方の中</p>

	<p>で、今子どもに関われる方がサポーターになってくださっています。それからサポーターズというのは、皆さんが企画をして、こども創造センターのスタッフと相談をして、子どもたちに楽しい造形活動とか遊びを伝えようという内容を検討していくものです。それが今、団体・個人を合わせて49です。この数が充分かと聞かれると、まだまだ拡大していく必要があると思いますし、中には水と土の芸術祭の市民サポーターズの皆さんも、こども創造センターのサポーターズの中にたくさん入られています。この形はやはり今後も拡大していく必要があると考えております。</p>
<p>申請者</p>	<p>あとアグリパークのパートナーズも31名いますが、この31名の方は全て地域の農家さんです。農業を教えるにあたって、リタイヤされた農家の方をサポーターとして配置させていただいて、まき割りですとか、ピザを焼く場合の焼き方ですとか、こういったものを指導していただく。この31名の体制は、アグリパークでは十分充足されている人数です。と言うのは、アグリパークには、インストラクターが十数名おり、そのインストラクターができない部分、調理の前段階のサポートとか、そういう形でサポートしてもらっていますので、この31名はアグリパークの事業では、充足されていると思っています。</p> <p>ただ、本事業において、これから私どもが事業をする中で、私どもの常設のスタッフが9名という中で、サポーターズがはたしてどの程度、またどこまでの係わりを持つかということについては、未知の部分であることは事実です。これが始まれば、「色々協力してあげるわよー」という方も、内々で何人かお声を上げていただいている方もいらっしゃると思いますので、とりあえずそういう方と連携をしながら事業を進めていきたいと思っています。</p> <p>ちょっと前後するかもしれませんが、体験学習についての質問がありました。飯ごう炊さん等のご質問に関してですが、私ども、アグリパークでは羽釜、それから菱風荘においても飯ごう炊さんの事業を行っております。これは私どものスタッフが全てインストラクターということで配置をされており、菱風荘に関しましては、飯ごう炊さんの講座を受けた者が子どもたちに指導している、という形であり、子ども体験学習に関しては、場合によってはここのスタッフだけで足りなければ、アグリパークや、あるいは菱風荘のスタッフをイベントやそういう場合にも、応援体制を組むことは可能です。その辺は十分指導ができるのではないかなと思っています。</p> <p>次に、こども創造センターと本施設の差別化でございます。大変難しいテーマですが。</p>
<p>申請者</p>	<p>こども創造センターは、概ね未就学のお子さんとその親御さんがおいでになるので、小さい子たちと、その親御さんを対象に動いています。小さいお子さんと親御さんも当然造形活動とか遊びに深く関心がありますので、アーティスト・イン・レジデンス事業も、こども創造センターで色んな形で、他の団体さんと協力をしながらやっている形です。おそらく、この施設も、年齢層はちょっと上がる形で動いていく、ということと、もう少し市民サポーターと言うか、市の協働体制をさらに強くするという形が出てくるのかと思います。場合によっては、同じサポーターが両方登録という可能性も私はあるのではないかと思います。</p>

	<p>あと、中高生の取り組みについては、みらいズworksさんが精力的に取り組んでいる事業でございますので、小見さんから。</p>
申請者	<p>まず事業計画書のP14の「中高生の居場所づくり事業」の具体的な企画についてですが、大学生ジブントーク、オトナ本気トーク等は新潟県内外の中学校・高校等で数多く実施してまいりました。特に中高生になりますと、自分の進路を悩む時期ですが、親と、先生とはまた違う生き方の社会人の方に出会う。出会って終わりではなくて、少し対話をしながら自分の選択の可能性や、こんな大人がいるんだったら自分もこういう学問を学んでみようかなとか、その先の仕事っていうところの可能性も開けてくるのかと思っています。</p> <p>大学生ジブントークに関しては、今年度も日光で実施しておりまして、新潟市内の大学生が全部で40名くらい、事前に研修を3~4回行い、自分の進路選択のきっかけですとか、今こんなことを学んでいるよ、とか、こんなつらいこともあったけどこういうことをして乗り越えたよ、なんていう具体的なストーリーというのを中高生に語りかけて、その後対話するというようなプログラムを実施しております。</p> <p>今は学校単位でやっておりますので、学校以外のところでも、もう一步自分の可能性を開きたい、という子どもたちにチャンスを作りたいなと思って、このような企画を提案させていただきました。</p> <p>また、哲学カフェでは、「何のために生きるのか」とか、「学ぶってどういうことだ」とか、普段学校生活で考えないような、そもそものことをみんなで語り合っ、もっと人生を豊かにするための視点等を子どもたちにも見てもらえたらいいな、と思っています。他にも中高生がやってみたいという自発的な企画を応援していけるような居場所にしたいなと思っています。</p> <p>あともう一点、不登校の子ども達に対する居場所についてですが、若者支援センター“オール”でも、同じような目的で取り組みはされていると思いますが、放課後の午後4時くらいになると学校に通っている子どもたちがおそらく来ると思います。その前の、午後の時間、1~3時くらいまでは、そういう学校に行っていない子どもたちも、気楽に来やすいようにすると、学校に通ってない子も安心して自分の居場所を見つけられるような、そんな場になったらいいなと考えております。以上です。</p>
申請者	<p>あと丹治委員からご質問がございました、代表者会議についてご意見がございまして、確かにご心配されることについては十分理解します。基本的に代表者会議で決めることというのは、予算面や安全面、執行のことで、現場の方の運営に関しましては、基本的には現場の館長の主導で動いていくということです。</p>
申請者	<p>その辺ちょっとよろしいでしょうか。その辺はそれぞれの現場現場で当然動いておりますので、私らが聞かなくてもいいようなことは当然代表者会議では話題にはなりません。当然たくさんいろんな事、事象が起きますので、それぞれの世界で、ハウレンソウをして、その現場現場での解決。ただ、方向性や予算です。事業をやる、予算がこれだけ上がるが、など、このようなことは、代表者会議の場で「よし、じゃあ行こう」と決まれば、明日もうOKが出ます。お役所と言ったら失礼で</p>

	<p>すが、大きな会社や組織ですと、すごく時間がかかるような問題、事象でも、代表者会議で早く決まる。そういうものです。それは安心していただければと思います。</p>
申請者	<p>今、申し上げましたように、現場の館長が決裁できる金額の範囲は、事務手続き上決めさせていただいております。5万円までとか。それを超えるものは、決裁が必要だが、やはり決裁をスピーディーにしないではいけません。例えば、愛宕商事当社一社でやっている部分については、上の者が「いいよ」と言えば決まりますが、事業体でやっていると、それぞれ問題を共有しますが、構成団体ごとの決定が遅れるに従って、どんどん遅れていく。これを避けたいということです。ですから、現場でやることの内容につきましては、基本的には現場が前向きに取り組むものについては、代表者会議でNOと言ったことはございません。</p> <p>それからアーティストの公募に関してですが、正直申し上げまして、現在のところ、公募について、全国の事例で、なかなか招聘が上手くいかない、というお声を聞いているだけです。実際どのようにやっていくのか、というご質問がありましたが、現在は、文化庁が主導を取っていますが、文化庁のホームページにアーティスト・イン・レジデンスを実施する施設が、情報を掲載していく。それが全てホームページ上に記載されて、全世界にネットワークで広がるということ。それに返ってくるものに対して、対応していく、というのが主体です。公募します、といくら全国紙に載せようとも、国内全部には伝わりますが、海外には伝わりません。公募の方法をどのようにしていくのか、頭の痛いところではありますが、第一回目の公募については、市が公募すると聞いておりますので、その中で一緒になって、その手法、やり方を私どもなりに吟味させていただいて、参考にしたいと思っております。</p> <p>ただ国内のアーティストに向けまして、例えば、地域で活動している芸術家の皆さんに対しては、私どもの人脈・ネットワークでも十分対応できるものと考えています。</p>
中村会長	<p>もうちょっとここをお聞きしたいということはいかがでしょうか。今お答えいただいたものに関連して。</p>
杉浦委員	<p>アーティストの公募に関して、そこが弱い、というお話はいただいておりますが、先程の文化庁のアーティスト・イン・レジデンスのホームページは、自分も関わっていましたが、ほぼほぼ募集しても来ないです。現実には、地域のアーティストとかではなく、外のアーティストとどう繋がっていくか、ということについて、どのような体制を取られるのか、こういった手法で対応されるのか、というのが、今後の検討なのかもしれないですけど、現状の方向性でも結構ですので、何かコメントをいただければ。</p>
申請者	<p>どんな活動家がいるのか、どんな作家がいるのか、ということに関しまして、前・近代美術館館長に顧問でご就任いただくことになっております。その方は、色々な情報を持っていらっしゃる。そういう情報・人脈を情報共有しながら場合によっては、ピンポイントでお願いしてくケースもあるのではないかなと思っております。それは我々だけではなく色々なお声を伺って、「こんなアーティストを呼んでほしい」ということがあれば、もしかして出かけて行ってお願いするケースもあるのかもしれません。ただ、その部分については、まだこれからの取り組みで、正直、具</p>

	<p>体的にホームページに掲載して、広く公募するまでは私ども責任を持って行いますが、その後について、特に海外アーティストについては、正直申し上げて市の力を借りながら一緒に公募していかなければならないと思っています。</p>
中村会長	<p>では他の視点からでもよろしいですので、ご質問いただければと思います。いかがでしょうか。</p> <p>5つの団体が一緒というところで、強みと課題っていうものがそれぞれあると思いますが、さっきの活性化というところと重ね合わせて、もしご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。外の視点が入ることによって、活性化されるのではないかという丹治委員から先ほど意見があったかと思いますが、それについてです。</p>
申請者	<p>組織の中にも挙げさせていただいております。実はご指摘ありました機能、あくまでアーティスト・イン・レジデンス選考委員会というのは選考するだけの委員会ではないように私たちは捉えており、その委員の皆さまからそういった色んなご意見を伺う場にしていきたいと思っています。私どもでの自己検証と言いますか、そういったものの中も含めまして、外部の意見というのも大事でございますので、それはこのアーティスト・イン・レジデンス実行委員会という組織をせっかく作ることで、そこにそういう目的を持たせて機能させていきたいと思っています。</p> <p>先程お答えし忘れましたが、若者向けだけではなく地域の年齢の高い皆さんに対してどう訴求するかという問題ですが、「異人池の会」ですとか、構成団体のビルサービスやグリーン産業が関わっている齋藤邸別邸や砂丘館は、そのような施設はむしろ高齢者の方のご利用が多い施設ですので、そういう施設とこの施設が連携することによって有機的効果が出るんだろうと考えております。</p>
中村会長	<p>ありがとうございました。ヒアリングを終了したいと思います。</p> <p>これでプレゼンテーション及びヒアリングを終了いたします。なお、評価の結果については後日事務局よりご連絡いたします。申請者の皆さまはご退席をお願いします。</p>